

ご挨拶

日本医療機器産業連合会 会長 和地孝氏



日本医療機器産業連合会 会長の和地でございます。

開会に先立ちまして、主催者を代表して、一言ご挨拶申し上げます。

本日はお寒い中、このようなたくさんの方に、医療機器市民フォーラムにお越しいただきまして、誠にありがとうございます。このフォーラムは平成18年から開催しており、今回で4回目を迎えます。主催いたします日本医療機器産業連合会は、通称「医機連」と申しまして、CTやMRIと言った大型の診断装置から、ペースメーカーのような治療機器、さらにはピンセット、メスに至るまで30万品種に及ぶ幅広い医療機器を取り扱う20の業界団体の連合会でございます。

また、共同主催の医療技術産業戦略コンソーシアムは、通称「METIS（メティス）」と呼ばれており、産官学が協力し、日本発の革新的な医療機器を開発し、国民の健康維持・増進に貢献しようと立ち上げられたものです。医機連及びMETISの詳細につきましては、お手元のプログラムをご参照いただければと思います。

さて、皆様は「医療」と言うとともに「薬」を思い浮かべられると思いますが、20世紀後半から、人工臓器や内視鏡、MRIなど画期的な技術が次々と開発され、「医療機器」が医療の進歩に大きく貢献しています。医療における主役が

「薬」から「医療機器」へと移りつつあると言っても過言ではありません。医療機器が進歩することにより、新しい治療方法や診断方法が生まれます。これまでは見つけることができなかった病気が早期に発見できたり、大きくお腹を切らなければならなかった手術も、わずかな傷で、痛みの少ない手術へと変わりつつあります。また、最近では駅や学校などの公共施設に「AED」と呼ばれる救命用の医療機器が設置されているのを皆様もお気づきかと思います。今や、病院の中だけではなく家庭や職場に至るまで、医療機器は身近な存在になりました。このような医療機器の発展がもたらす医療の進歩について、少しでも国民の皆様に理解を深めて頂きたいとの思いから、毎年、このフォーラムを開催しております。

本日は、我が国のがん対策推進の先頭に立っておられます、国立がんセンター名誉総長の垣添忠生先生にプログラムコーディネートをお願いし、国民にとって非常に関心が高い「がん」をテーマに取り上げました。昨年行った来場者アンケートの結果を見ましても、「がんを取り上げて欲しい」との要望が圧倒的に多かった為、今回このような企画をさせて頂きました。是非、最後までお聞きいただき、最新の医療技術と医療機器にその大きな可能性を感じていただければ幸いに存じます。どうもありがとうございました。

プログラムコーディネーター 挨拶

プログラムコーディネーター

垣添 忠生氏

国立がんセンター名誉総長

1967年東京大学医学部卒業。都立豊島病院、医療法人藤間病院外科、国立がんセンター病院勤務を経て、1987年から同病院手術部長、1992年から病院長、2002年から総長、2007年から現職。財団法人日本対がん協会会長。国立がんセンター田宮賞、高松宮妃癌研究基金学術賞、日本医師会医学賞などを受賞。



今回のフォーラムのプログラムの企画立案でいろいろとご相談を受けまして、考えたことを少しご紹介したいと思います。

その前に、本フォーラムの主催者は日本医療機器産業連合会と医療技術産業戦略コンソーシアム（METIS）ですが、がん医療も含め医療には「薬の進歩」と「機械の進歩」の両方が非常に重要です。普段はあまり意識しませんが、医療技術の進歩のおかげで診断が進歩し、治療が進歩し、さらに「診断の進歩」と「治療の進歩」が融合するような形で、がん医療に典型的に現れているような進歩があります。それを支える医療産業技術は非常に重要です。今日は一般の方にたくさんお集まりいただき、このようなフォーラムをお聞きいただけることを大変ありがたく思っております。

さて、本日の全体の題は「知っておきたい『がん』の話－予防・診断・治療－」、全体のタイトルが「医療機器市民フォーラム」ですので、まず医療機器の話からしますと、がん医療の進歩は、「診断の進歩」と「治療の進歩」が相まって、ちょうど車の両輪のようにお互いが手を携わるような形でどんどん進んでいきます。そして医療機器は、その診断に関しても治療に関しても極めて大事なのです。

それからもう一つ、がんという病気について触れますと、今男性は一生のうち2人に1人ががんを経験するといわれています。女性は3人に1人で、年間に今約30万人を surpass 方がんで亡くなっています。日本人は年間に今約100万人が亡

くなりますから、亡くなる方の3人に1人はがんなのです。ということは、どなたにとってもがんという病気は無縁ではなく、今回の第4回にがんをぜひ取り上げてほしいというご要望が非常に多かったこともよく分かりますし、皆さん方の周囲をいろいろお考えになっても、がんを経験した人の話を聞かれたり、あるいはご自分自身ががんである、ご家族ががんであるという方が、本当にたくさんおられるということで

実は私自身も以前に、内視鏡で切除しましたが大腸がんを経験していますし、それからしばらくたって、たまたま腎臓のがんが見つかり、小さかったので腎臓の部分切除をしてすぐ元気になりましたが、一応がんを2回経験しています。それから、日本人は消化器と呼吸器のがんが非常に多いのですが、国立がんセンター中央病院の十数人の部長さんは、ポリープがんを簡単に切除する人も含めると、半数くらいの方が胃がんや大腸がんの経験者ということで、本当に私どもに身近な、誰しも避けて通れない病気です。それからがんは、小児がんという特殊ながんは別にして、一般には年齢とともにどんどん増えていく病気ですので、このがんを取り上げることは、要望も多いが私ども医療従事者にとっても大変重要な課題です。

そして、医療機器の診断・治療面の進歩ですが、診断、つまりがんを見つけることに関しては、なるべく早く見つけようということで、早期発見・早期治療とずっと言われてきま

した。例えば肺がんの診断のときに胸の写真を撮って、昔は誰が見ても一目で分かるような大きな影があって見つかった。これではせっかく見つけてもなかなか治すことができないので、それを早く見つけるということで、大きな影がだんだん小さくなっていき、普通のレントゲン写真では写らないものを、CTという体の断面像で調べる検査で、非常に淡い小さな影が見つかるようになってきた。そうすると今度は、あまり早く見つけたために果たしてこれが本当に肺がんなのか、あるいは他の炎症性の変化なのかいろいろな検査をしても分からず、結局経過を見て3カ月後、半年後にもう1回検査をしなくてはいけなくなってきました。

従って、大きなものから小さいものを早く見つける技術がどんどん進歩してきて、あまりに早く見つけると、今度は逆に診断がつかなくなってくるという新しい問題があります。ですから、私は適時発見、いいときに発見をして、それに適切な対応をするということをよく申し上げています。言うは易くでなかなか難しい問題ですが、そういう問題も新たに生じています。

こういう問題を考える上で、がんの自然経過といいたしうか、がんがどのように発生してどのように大きくなっていくかはそれぞれのがんの状況でいろいろ違いますが、こういう学問的な背景を基にして、検診をどう考えるか、診断・治療をどう考えるかということとはとても大事になってきます。

それから、CT、MRI、超音波、内視鏡などいろいろな画像診断の方法があります。これは言ってみれば、がんの形を診断する形態診断になりますが、最近はそれに加えてPET検査といわれるアイソトープを使って体の中のがんを見つける検査なども発達してきました。これは形態診断とは違って一種の機能診断といいたしうか、ある病巣がブドウ糖の代謝をどのように活発に行っているかということで診断する新しい方法です。それでもがんは必ずしも完全に見つかるわけではありません。でも、こういう形態診断と機能診断が必要になってきます。

さらに、がんが遺伝子の病気ということがだんだん分かってきました。遺伝子診断がどんどん取り込まれてきました。その一つの例は、例えば白血病は従来ですと専門の先生が顕微鏡の下で白血球を見て、白血球1,000個の中に1個ぐらい存在する白血病細胞をようやく見つけていたが、今は遺伝子

診断で10万個ぐらいの白血球の中に1個でもがん細胞があると見つけられる時代になってきた。そうすると、今まで化学療法をやってきて、もうこれでいいと思ってやめていたものが、それでは実はまだ不十分だということが適格に診断できる。そうすると、もう少し化学療法を追加して、きちんと治してやめることができるようになってきた。そういう意味で、早期診断のさらにぎりぎりのところに、そのような新しい遺伝子診断や機能診断が加わってきたのです。

いずれにしても、新しい診断技術、治療技術が進んできると、特に新しい技術が日本に導入されるためには、臨床試験といって患者さんのご理解と協力を得て試験をして、その安全性と有効性をきちんと評価し、厚生労働省に申請してそれが認可されることになります。わが国はこの認可体制にこれまで非常に大きな問題がありました。薬に関しては、外国で既に承認されているのに日本で使えない抗がん剤の数が多過ぎるという患者さんや家族の声を受けて、随分体制が整ってきました。審査をする人員も約倍増して、だいぶ早くなっています。しかし、医療機器に関して問題点は随分言われていますが、まだまだ認可の体制は弱い。これは工学部を出た専門の先生方が認可をする機関の中にきちんと審査員として加わる体制が必要で、これをもっと強化していく必要があります。

わが国には非常に優れた技術をたくさん持った医療機器の会社がありますし、発展する芽に相当する新しいアイデアがたくさんあるわけですが、それを製品化し、臨床試験をして最終的に売り出すための体制がちよっと弱い。結局そういう新しい機械が出てくれば、その恩恵を受けるのは皆様方ですから、そういう声を上げていただくと大変ありがたいと私どもは思っております。薬に少し遅れていますが、医療機器の認可体制ももっと強化することが必要だと思います。

そういったことを踏まえまして、本日は癌研究会の武藤先生にがんの予防から診断、治療まで全般を、その後、齋巢先生に前立腺がん、齊藤先生に乳がん、唐澤先生に放射線治療に関してお話をいただき、全体の議論をすることになっております。

どうぞ本日のこのフォーラムが皆様方にとってお役に立つことを念じております。どうもありがとうございました。